再掲載

特集 子どものかくれた力②

――かげの声 評価の裏側を探る

先生たちの意見

先月号では、「毎日の生活の中で、お父さんやお母さんにもっとわかってほしいと思うことや、いいたいことを自由に書いてごらんないさい」と当時の小学六年生に問い、子どもたちが書き記した作文をご紹介しました。

今号では、先生方が考える「子どものかくれた力」についてご紹介します。

出典：「育てる」父母と教師でつくる家庭教育誌 68号昭和49（1974）年2月25日発行

子どもの心の声に耳を傾けて下さい

小峰　すすき（杉並第四小学校教員）

ネバナラヌ子

卒業も間近になった六年生の間で、サイン集めがはやり出しました。授業中も夢中でやっている子がいるので、

「それは、休み時間にするか、家でしましょう。」

といったところ、A子が、

「家なんかじゃ、すぐとり上げられちゃうわ。勉強以外のことは、みんなとり上げられちゃうもの。」

というのです。

「お母さんは、私が本を読むか、ノートに書いているかしていれば安心しているんだ。他の人はいいなあ、自由にさせてもらって。あたしは解放されてないんだ。」

と、訴えるように続けました。親子の間に、コミュニケーションが失われているのだな、と思いました。

A子は、成績のよい子です。いつも、何かしらやらなくては、という緊張感のある子で、ノートなどもきちんとしています。お母さんがつとめていて、だから、一層しっかりやってくれなくてはという期待感で、息づまるような家庭です。

「お母さんとは、話しているうちに、だんだん、だんだん息苦しくなっちゃうの。」

と、A子は言います。父母会にも出席される、少し昔かたぎのまじめなお母さん――まじめすぎて、子どもらしいミスができないのです。失敗は恥と思いこんでいるのです。お母さんは、母親が昼間いないからといわれまいと、一生懸命になってしまっています。学校でもビシビシやってください、といわれます。

そうして育ったA子は、単独でコツコツとやることはできるのですが、協調性に乏しいのです。エゴイストとみられてしまって、リーダー格になれません。

日曜日にも音楽のレッスンに通っていて、いつもネバラヌ状態のA子の逃げ場は、児童館です。児童館では新聞も作れるし、本も読めるし――、結構、児童館の先生方から重宝がられる存在になっています。けれども、

「世の中で一番おっかないのは、お母さん。叱らなければ、どんなにいいかなあ。」
というA子をみると、寂しい気がします。
結局、親が、自分の立場からの路線をしいて、子どもを走らせてしまって、子どもの出したい一面を伸ばせないことになっているのだと思います。

伸びる芽をむしられて

こんな子のことを思い出します。
B君は、三年生のヤンチャ坊主でした。お母さんは、B君を、気が荒くて、落ちつきがなくて、と評していました。しかし、一対一で話すと、植物のこと、虫のこと、実に関心が深くて、毛虫を蛾にかえすとか、アゲハの卵を成虫にかえすとかいうことも上手でした。
私は、そういうことを勉強といいたいのに、お母さんは、かえってB君の興味を阻害するようなことをしました。せっかく飼っているのを、気持ちが悪いと捨てたり、今日、こんなことがあったんだよ、とB君が話しかけても、あなたのいうことは、いつもそれだけ？　と水をさすようにいったりするのでした。
B君は、道で毛虫をみつけても、家へ持って帰ればまた怒鳴られるから、かわりに友だちの背中に入れるというわるさになってしまうのです。

個人面談の時、そのお母さんがいいました。「うちの子は、ちっともいうことをきかないし、親の思うことの反対、反対をするんです。幸い、人格者といわれる音楽の先生をみつけたので、音楽といっしょに心も直していただきたくて、ピアノをはじめました。」
自分の子どもの心を理解しようともせずに、何が原因かと考えもせずに、子どもの人格まで、他人の先生につければ直るのではないかと思う――それは親のまちがいではないか、私がそういうと、しばらく考えて、またこういいました。
「私が思っても、祖父母もいますし、父親は、いい学校に入るために四教科をきたえなければといいますし……。」
それは、反省ではなく、責任転嫁ではないかと思います。

ゆとりを持って子どもに接して

卒業文集の中に、「学校で、いろいろな先生との出会いの中で、本からだけではない、大切なことを学びとることができた。」

という文を見て、うれしく思いました。

現代の風潮を極端におしすすめると、学校では、集団の中で子どもの心を育てようと努力し、家庭では塾に通わせて勉強させるという、まるで逆の関係になってしまうことにもなります。

教師自身にも、反省すべきことがあると思います。子どもと、教師と親と、三者三様に、時代の波に押されて動いている気がしないでもないのです。

ともあれ、お母さんに望みたいことは、子どもが〝お母さん〟といってきた時、ゆとりを持って子どもに対することのできるお母さんであってほしいということです。

育てる時期にはチャンスがあります。それを大事にしてほしいのです。

謙虚に受けとめたい 子どもの見方、考え方

長谷川　英男（墨田区小梅小学校教員）

おとなには思いもよらない　子どもの言動

一年生の前期にみられることですが、教室の黒板に、〝せんせいのバカ〟というらくがきがあります。そこには、字を覚えたうれしさと、担任の先生への心の近しさ、親しさなどがあるようです。

「おかあさんがぼくをおこると、ぼくのむねはどきっとする。ぼくは、おかあさんからはなれていって、おかあさんのどてかぼちゃ、はなたれ、とんま、ばかという。

おかあさん、ごめんね。」

と書いた一年生がいる。ここにも、その子なりの、どてかぼちゃ、はなたれ、とんま、ばかということばのようには汚れていない心情があります。

なんということをする子だろう、なんということを

言う子だろう、こまった子だ、これからが心配だとばかり、子どものその心情も察知しないで、皮相的、外形的に強制し、俗世間的なワクにはめこもうとしたらどうなるでしょう。個性どころか人格形成の上にまで、影響するにちがいありません。

自分の担任でない先生を〝おじさん〟と言ったり〝おばさん〟と言ったりする一年生がいます。おかあさんは、それを知ってびっくりします。先生に対してなんと失礼な！　先生を先生だとわからないほど大バカなのか、親としてこんな恥ずかしいことはないかと思ったりします（これは実際にある話です）。おかあさん方は、あの人は先生であの人は先生ではないということを納得できない子に、どう説明してわからせますか？

保健室の養護の先生を、その白衣のせいもあって〝おいしゃさん〟あるいは〝かんごふさん〟と思う子も少なくありません。この場合も、〝おいしゃさん〟でもなく、〝かんごふさん〟でもないことを、どのように納得させられるでしょうか。

ある二年生の男の子がおかあさんに、

「ぼくは、おかしやさんのうちに生まれればよかった。」

と言いました。いつでも食べたいおかしをただで食べられるから、という理由なのでした。

店のおかしが、ただで仕入れられたものではないこと、売り上げはすべてもうけではないことなどが、わかっていないのです。だからといって、この子はバカ、なのではありません。こういう見方、感じ方の子は、この子だけではありません。

おとなにとっては意外な子どもの見方、感じ方、考え方を、私たちは、謙虚にみなくてはいけない、俗世間的な評価をしてはいけない、差別し軽視してはいけない、大事にしていきたいものです。

この心がけが、子どもの活動を個性的に、創造的に伸ばす土台であると考えます。

たとえば、一年生が、自分の担任でない先生を〝おじさん〟と言ったり〝おばさん〟と言ったりした場合を考えてみます。そういう子の担任の立場だったとしてみましょう。

「○男君が〝おじさん〟と言った人が、先生なのかどうかしらべるには、どうしたらわかるでしょう？」

と問いかけたらどうなるでしょう。

学校の中でどこにいるのかさがしたらよい、教室にいれば先生だ、なにをしているのか見にいけばわかる、生徒に勉強を教えていれば先生だ、という解決方法が、子どもたちの中から考え出されると思います。こんなきっかけから学習が成立するなら、学習方法や学習内容がそれぞれの子どもの個性をひき出し、その子その子なりの感じ方、考え方を育てていくことになると思います。

こんな作文を書いた子もいます。

「わたしが家に帰ると、おとうさんはかならず〝宿題があるだろう〟という。〝ないわ〟といっても〝うそだ〟という。

わたしの好きな絵をやると、〝算数や国語をやれ〟という。

このあいだは、わたしのかいた絵をみて、〝なんだ、絵ばっかりやっていても、こんな黒っぽい川にぬって〟といった。ほんとうにきたない川を写生したのです。」

子どもの成長を励ます親に

人の一生は、己をいっそう自覚し、自己更新の道を不断に前進するプロセスだと思います。そのことがきびしい道でありながら、みずからのよろこびであるというのが、あるべき人生でしょう。

自己に挑み、自己を成長させていくように励ますことを、親や教師はしていくべきだと思います。どの子の作品や活動もまず受容して認め、その子なりの動機、動向をつかみ、温かく、しかも厳しい評価の目でみつめていくことが、子どもたちが自分をみつめ、発奮し、努力し、くふうするようにさせる、一番大きな力であると考えます。

多面的な価値の発見を

岡崎　武博（杉並区高南中学校教員）

私たち教師や父母は、ひとりひとりの子どもが学校生活をとおして、生きていくための方途を子ども自身に見つけさせる義務があります。そのためには、あらゆる可能性の芽を伸ばしてやらなければならないと思うのです。

そこで、小さいうちから、さまざまな角度から自己評価を試みさせる修練が必要ではないでしょうか。できたかできないか、○か×かなど択一的にみるのではなく、視点や観点を変えつつ、自分の学習の全体を、学習の状況を、人格の全容を考えさせるのです。そうする中で、子どもは多元的な価値の存在を知り、価値の多面さに気づいていくでしょう。

オール1の子どもが、社会にでて有能な働きをする場合と、逆の場合とを一番よく知っているのは教師なのです。オール1とは、学校の場で、ある定められた枠の中で、ある条件を設定してきめたのです。だからこそ、多面的な価値の発見を、通信簿をとおして、親は子をみてもらいたいのです。

私の担任した生徒に、無口で社会性も協力性も乏しく、将来心配だと思った男子生徒がいました。しかし、現在ではりっぱな盆栽業を営み、ひとり黙々と個性のある盆栽をつくり、一鉢何十万円のものをたくさんつくっています。あまり売りたがらないから、かえって買い手がつくとのことです。多面性を見落とすと、集団の中で埋没してしまい、個性を失ってしまいがちになります。

現在の成績では測れない 子どもの将来

前田　静夫（財団法人育てる会事務局長）

子どもの小学校時代の成績は、その人の一生の運命をきめる決め手でないことは、だれでも知っています。しかし、わが子のこととなると、つい通知表の成績に一喜一憂したり、知能検査の結果を心配したりしがちです。知能開発とか英才教育とかいうことばについつい心がひかれ、その関係の本を読んだり、話を聞いたりします。

私は、教育についての科学を否定はしません。しかし、心理学や生理学等は一応の参考にしても、わが子の教育にその知識を応用することは、よほど考えねばならないと思います。人間は、あまりにも個人差が大きく、成長の発達段階も、それぞれに違いますから。神童も二十才すぎるとただの人となり、目だたない存在の少年が非凡な人物となることも、ままあるのです。

自分の兄弟のことを書くのはペンも重く、果たして教育上の参考になるかどうか、気になる点もありますが、成績の悪かった弟の成長について語り、私の教育についての考えの一端を述べさせていただきます。

愉快な通知表

「ただいま！」

玄関の戸をあけて、元気よく帰ってきた一年生の弟、明るく、動作もきびきびして、兄弟にかわいがられていた弟が、一学期の通知表を片手に、家の中に飛び込んできました。

その日、ちょうど父も仕事が休みだったとみえて、家にいました。父は、子どもの教育に熱心で、自分は小学校の三年までしかいかなかったが、子どもたちは中学校以上の学校に入れたいという、強い願いをもっていました。そのころは、大正時代の終わりごろですから、中学校に行く家庭は少なかったのです。

「これからの時代は、学問の時代だ。家には財産がないのだから、ひとりひとりが、しっかり勉強して、ひとりだちできるようにならなくては。」

と口ぐせのように言っていた父は、帰ってきた弟の成績にも大きな関心をもっていたにちがいありません。
「おとうさん、つうしんぼ！」
と、自信にみちた大きな声で言って、さし出した通知表を父は手にして、じっとみていました。
「うん、みごとなものだ。みんな、兵（丙）隊さんだ。」
と言って、その通知表は、その場にいあわせた母や兄弟に、つぎつぎと廻覧されました。
父のことばのとおり、全部そろって丙だったのです。甲乙丙丁が当時の成績評価の記号です。丙というと下位の成績です。父をはじめ皆、弟には期待していたのです。はきはきして、活動的で積極性がありましたので。鶏舎から落ちようとしている卵を目ざとく見つけて、ほかの兄弟が、下駄をはこうとしているまに、庭に飛びおりて、間一髪で卵を割らなかったこともあります。
その弟が、得意になって見せた通知表、さぞ父は、がっかりしたろうと思って、父の顔を見たのですが、いっこうに、そんな様子は見えません。むしろ、明るい表情なのです。
「サアちゃん（弟の愛称）、よく出来た。みんな兵隊さんだから、歩くのも、じょうずだろう。学校では、どんな歩き方をするか、へやの中を歩いてごらん。」
父の言った言葉を、ほめ言葉と受けとって、弟は大いばりで、座敷の中を歩き出しました。手を目の高さにふりあげ、足を、せいいっぱいもち上げて歩きました。くりくりした目。明るい笑顔。
それをみて、かわいそうだとか、父に小言を言われはしないかという心配もふっ飛んで、手をたたいて喜んだ兄弟たち。父も母も、無邪気な弟に静かに、ほほえんでいました。

手紙を囲んで

それから十年近く経ったころです。大阪にいる弟から手紙がとどきました。
父の念願どおり、他の弟たちは、それぞれに中学校に進学し、さらに上級の学校へと進んでいきました。七番目の弟だけが、小学校の高等科を卒業すると、すぐに、大阪の理髪店に奉公しました。

はじめてみた弟の手紙。それまでは、弟の様子は、風のたよりで、元気で働いていると聞いていただけです。「カミソリの使い方は、店で一番うまいとほめられています。近く理容師の試験を受けます。勉強が苦手ですが、生理学や衛生学の本を、毎晩、主人に、おしえてもらっています。」

主人が、自分の子のように、かわいがっている様子も書いてありました。私が心を打たれたのは、手紙の内容は、もちろんのことですが、その文章と字でした。小学校に入学以来、弟の通知表について、家族の者は、一度も話題にしたことはなく、字は読み書きできないものとあきらめていたからです。手紙を囲んで、その日は、弟のことで、話がはずみました。

弟は、見事に試験に合格しました。母は涙を目に浮かべて喜びました。ふびんな子が、苦労の甲斐があって一人前の職人になった。これで生きていかれると、感無量であったことでしょう。

せっかちに、現在の成績で、子どもの将来を予測することを避けましょう。人間は、人間が考える以上に、すばらしい能力を秘めていることを私は言いたいのです。どんな子どもにも。そのことを信じて、あたたかく見守られて育つ子は、幸せだと思います。同時に、親も幸福を味わうのではないでしょうか。子の幸せをみるにまさる親の幸福はありませんから。